

マリア・モンテッソーリ教育学と感覚教育 ー人間形成の中心的課題ー

Maria Montessori Pedagogy and gardening
The central task of human formation

保田 恵莉*

滋賀短期大学 幼児教育保育学科

Eri YASUDA

Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

Abstract: Sensory organs are most developed during infancy. It is good to be sensitive to the senses during this period and to know the environment surrounding you accurately. Children learn to adapt to their environment. Montessori sensory aids sharpen children's minds. Jobs in each field are prepared to further develop the ability to perceive. Help-seeking children need a place to resonate and a person to empathize with. This paper discusses character development through cooperation with community support facilities. The Bible showed that man becomes man by the Holy Spirit. Rich sensory experience cultivates powers of observation and discernment and builds the foundation for intellectual activities in infancy.

キーワード: モンテッソーリ教育学, 感覚教育, インカルネーション,
Art 活動支援,

Keyword: Montessori Pedagogy, sensory education, incarnation,
Art activity support,

1. はじめに

マリア・モンテッソーリ (Maria Montessori, 1870-1952) により始められた乳幼児教育法であるモンテッソー

リ教育学は、物理的環境に特徴がある。物理的環境としては、モンテッソーリが考案した教具が広く馴染みやすい。

*mail: yasuda@sumire.ac.jp

しかし、モンテッソーリは、教具に限らず、こどもが自由に選択し、遊ぶ(仕事する)もの全体が感覚を育てる物理的環境であるとし、建築や設備、道具、教材に関して、様々な具体的な提案をした。さらに、こどもの家での実践を通じて、マリア・モンテッソーリは、感覚は世界への入り口であり、人間は、世界を知るための第一歩を自分の感覚を通じて感ずることから始まることを伝授した。筆者は、今年度、4月から専門演習における地域支援を学生と取り組み、社会に子育て支援の種を蒔くことを目的とする研究を継続してきた。人間形成の中心的課題と目的を達成する軸にモンテッソーリ教育学の理論を取り上げながら、感覚教育を重んじている。さらに、モンテッソーリ教育学理論(聖書によるインカルネーション「受肉」の分析)を加えながら研究を進めている。本稿では、学生たちが自ら創り上げることが可能な場面を取り上げるため、STEAM教育の一部を実践に取り上げた。STEAM教育とは、次のようなものを指している。

Science サイエンス科学 Technology テクノロジー技術・Engineering エンジニア工学・Art アート芸術(手作りを含む art)・Mathematics マスマティク数学を意味し、人間の内面に潜む感覚を構築するものと考えられる。同時に、モンテッソーリ教育学は、自己教育力・他人の個性を受け入れる社会性が育つ教育であ

り両者の教育には接点があることが理解できる。

本研究では、STEAM教育の中でも特にArt アート芸術に着目し、施設環境などを追求していった。器官と機能を、誕生後に使い、どのように洗練していくかは、環境との関わり方が重要になってくる。施設での観察では、壁面制作や創作玩具がどのようにこどもの心を惹きつけるのか、調査を行う。学生たちが直接関わりを持ち、支援者となり、支援を要するこどもに遊び(仕事)を提供することを試みることを考えた。そして、手に取って扱う玩具は、こどもの感覚を養う玩具であること、また、支援児が抵抗なく自然体で使える玩具が開発できないものかなど、多角的に考えた。具体的に学生と話し合い、玩具の提供場所は、近隣地域の施設「やまびこ支援教室」を考えた。さらに、モンテッソーリ教育学では、京都市に位置するモンテッソーリ園「深草子こどもの家」を基本に、自然の営みや創造的实践から感覚教育を調査していくことにした。感覚は、考えることに先行し、こどもの脳の深い記憶に刻み込まれる。そして感覚受容とその記憶は、考えた、創ったりする行動の基礎となる。本研究では、モンテッソーリ教育学は自然の法則に従い、こどもが成長する教育であることや人間を救う教育であることを念頭に考察する。こどもの誕生からこども自身が持ち得た非認知能力を養う幾つもの感覚教育に着目し、感覚がこどもの

人格形成の中心的課題であり、こどもの成長の可能性の途上にあることに着目した。(注:本稿に掲載する写真は、全て許可を得ている)

2. モンテッソーリ教育学の生命倫理

人は人類の進歩を可能にする道筋を過去から現在に渡り直観に頼り歩んでいるように思う。自然科学は実験を手段とし、同じく人類の進歩を可能にする道筋を辿ってきているように感じている。手段や方法が異なるが、同じように人類の文化と道徳の改善に繋がっているのではないだろうか。マリア・モンテッソーリはこどもに善を行うことを定義づけ、次のように述べている。

『病理的な事象と社会的不正義の奥底に我々は深い何者かを発見する。もう少し具体的に述べると、このことは人類の魂の追求である。人の精神は、図り知れない永遠の宇宙に入り、化学の実験に似た新しい形態を突然生み出す。それこそ、我々が道徳と呼ぶものである¹⁾』

続けて、モンテッソーリは、次のように述べた。

『人間は、美・真実・善悪を受肉(incarnate)している。生命は、観念論に基づき、哲学、芸術と同じ方向にある。人間は観察の距離を辿りながら、直観を重視し、人格を樹立させていく²⁾』

1970年代、マリア・モンテッソーリは、

社会主義的側面に対して批判を受けながら、ある側面からは自由主義者であると決めつけられた。モンテッソーリは、社会主義者でも自由主義者でもなく、人間個人と社会との関係を正確に融合しようと務めたが、当時の人間観の荒れたローマにおいては、周囲からの理解を得られなかった。

モンテッソーリは自身の教育施設である「こどもの家」(イタリア語: Casa die Bambini, 英語: the Children's House)が、モンテッソーリにとって、こども観・発達観および教育の原則を具現化し、こどもの自己活動と自律的な発達を可能にする施設であることを示した。モンテッソーリ教育学と「こどもの家」は、当時の児童中心主義の時代精神を表すものとして、有名である。イタリアでは、こどもの体格に合わせた机と椅子など、物理的環境を実現した教育者としてマリア・モンテッソーリを位置付けた。

1970年代、モンテッソーリは、社会的な役割を担わないこどもが一人の人間として尊重されることがなく、まるで大人の所有物のように扱われ、尊厳を無視され、従属させることに抵抗を示した。こどもは精神を形成し発達するために、自らの発達の法則・計画に基づき、自律的に活動し、環境と相互に関わることで成長していくものである。また、こどもは大人とは異なる性質を持っている。モンテッソーリは、この点を重んじ、生まれながらにこどもが持つ発達の法則と計画に基づき、発達のために必要な環境との

関わりが持てるよう、こどもの自律的活動を尊重したと捉えた。こどもの生命尊重のためのモンテッソーリ教育学の生命倫理は、現代の日本の乳幼児教育観で「こども主体」と述べられることに同化するものである。

2-1 インカルネーション(incarnation)理論

マリア・モンテッソーリ教育学の中心的課題として、受肉「インカルネーション(incarnation)」が挙げられる。ヨーロッパでは、一般的に知られているが、日本では、神学的なものと定義されており、知る者が少ない。聖書から引用された人間形成の言葉として受け入れられている。受肉「インカルネーション(incarnation)」を聖書から引用したことについて、モンテッソーリは次のように語った。

『世界に生きるために新生児の肉体に精神が宿るようになった。この概念は、キリスト教の中で最も崇高な神秘である。聖霊により受肉「インカルネーション(incarnation)」され、イエスが聖母マリアの胎内に宿り、人間になったことを意味する³⁾』

聖書ルカ第一章 35 節では、「聖霊があなたに降り、高き方の力が注がれる。生まれる子は、聖なる人、神の子と呼ばれる」と、記載されている。また、神の受肉「インカルネーション(incarnation)」の根拠は告知にある。世界的な画家たちが告知の場面を神秘に美しく表している。

イエス・キリストの母「マリア」に、「あなたは男の子を授かります」と、告げた。

その後、こどもの成長は、キリスト教の告知により、人間として誕生の瞬間から、全知全能の神の本性が宿るという説に対して、こどもの中に成人の力が宿るようなことはない。人間のこどもの成長は、精神の発達と共に長いプロセスによって決められる。という説が生まれた。

力ではなく、精神が宿ることから、新生児は未来に向かい発達を遂げる計画が必要である。こどもは、成長発達の自然法則に従い、自ら備わっている外側には見えない力を育みながら自己発揮を行うことが望ましいことを伝えている。このことは、現代の新教育要領で述べられている「10の力」に繋がる理論とも言える。

モンテッソーリ教育学における環境は、人的環境と物理的環境で構成される。モンテッソーリ教育学における活動の主体であるこどもに発達の自由を与える環境とは、人的環境である教師が控えめであるべきとし、対する物理的環境がこどもの活動を喚起・援助することが適切である。こどもの活動を動機づけるために、「美しさ」と「手を使って活動できること」の2点が重視された。

すなわち、色彩や形が美しく、魅力的な物理的環境は、こどもの精神を惹きつけ、活動を喚起する。

神の受肉「インカルネーション(incarnation)」は、言葉にならない人間の深い部分を育てる意味を持ち、繊細なこどもの心を育てている。

2-2 生命哲学理論

モンテッソーリ教育学とは、イタリアのマリア・モンテッソーリの設立したこどもの家から始まり、その後発展してきた教育である。1896年に医学部を卒業したモンテッソーリは、ローマ大学附属聖ジョヴァンニ病院で内科の助手として就職した。この時代のモンテッソーリは、ローマ大学精神科クリニックで働く機会も得られ、その助手も務めている。当時、医学部卒業時に精神医学の論文 *Recherche, batteriologiche, sui liquido, cefalorachidiano, dei dementi, paralitici* (マヒ性精神障害の脳髄液に関する細菌学的研究) を執筆し、翌年の1897年にも精神障害分野の研究論文を発表している。このようにモンテッソーリは、内科と精神科の助手として臨床的経験を重ねながら、精神障害の知見を深めていった。当時のイタリアでは、障害児は精神病院の閉じ込められた空間にいるというイメージを持たれており、障害児を教育の対象とすることは誰も考えなかった。しかし、E. M. スタンディング著(クラウス・ルーメル監修、佐藤幸江訳『モンテッソーリの発見』)のなかでは、いたいけなこどもを愛しむマリア・モンテッソーリについて、次のように語っている。

「保護施設の一つで不幸せなこども達が、まるで牢獄に入れられた囚人たちのように一箇所に固まっているところにモンテッソーリはやってきました。

(略)こども達の環境は文字通り無一物で、遊ぶようなものは何一つありません。そこにいたこども達のありようを見ている内にモンテッソーリは、こども達は食べるものよりももっと次元の高い別なものを求めていることを知りました。それは、幼気なこども達が手を使うことにより獲得できる知性への糸口であることに気付いたのです⁴⁾」

マリア・モンテッソーリが求めたこども像とは、心豊かであること、感性と創造性を持っている、そして自立している、また、その姿は、優しく思いやりがあること、一生涯学び続ける意欲を持っている姿であった。

モンテッソーリ自身は、障害児福祉の本質を捉えた学者であり、こどもを愛しみ、こどもの幸せを願い、誕生からのこどもの未知の可能性を育てていた。周囲の誰もが気付かない幼気なこどもの発達やこどもの発見に気が付くことができたのである。マリア・モンテッソーリの生命哲学理論は、次の図1のように集約される。

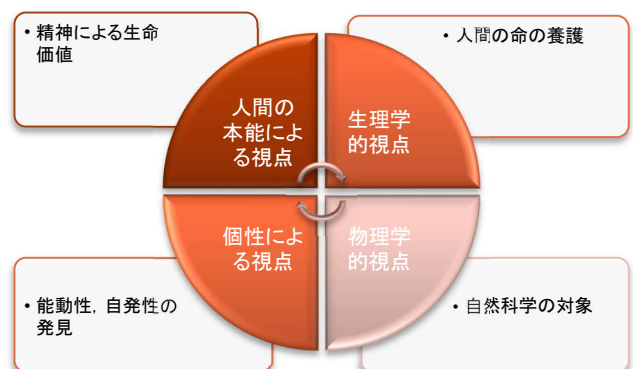


図1: 人間を構成する諸能力と生命哲学

マリア・モンテッソーリは、物理学的・生理学的な意味で「生命」という言葉を用いる。自然科学の対象となる「生命」を思想として重要に捉え、物理的な視点から観察している。このように、モンテッソーリは人間を構成する諸能力に4つの視点を挙げた。さらに、生命に関する哲学理論について、モンテッソーリは、次のように述べている。

『生命は栄えある女神であり、常に邁進している。途中に出会う環境では、全ての障害を踏み超えながら人間を創り上げていく。人間にとって最も大切なことは、生命の養護である⁵⁾』

能動性・自発性の発見は、生命の力の一つの側面である。人間の知的活動は、動物のように本能により動くものでなく、様々な方向に発達し、広がるものである。個性豊かに、可能性を持ちながら伸びていく。

3. モンテッソーリが捉える感覚教育

マリア・モンテッソーリの観察の態度には、ルソーやペスタロッチなどの学者にない独自性が潜んでいる。親密性と受容の態度だけでなく、こどもの内側に存在する「知的生命」を見出そうとする価値志向的な側面があり、科学者が昆虫や雲の動きを観察するような観察方法でなく、人間の知的生命の目覚めをこどもそのものから発見した。こどもの家では、障害を持つこどもも、知的発達の訓練を

受けることができる。幾つもの遊具の開発があり、科学の目を持つモンテッソーリは、治療教育の先進者であるイタールやセガンから影響を受け、受け継いだ生理学的な方法で、こどもが自分の手や目や耳などの諸感覚を用いて自分から、「知りたい」、「もっとわかりたい」と、いう心を育てることを思いついた。

9つの感覚教育プログラムは、感覚の発達が知的活動の発達の基礎になるとものであり、これらの教具遊具を用いることで、こどもは刺激の認識に喜びを見出すことができると考えた。

次に、「9つの教育プログラム」を、図2で提示する。

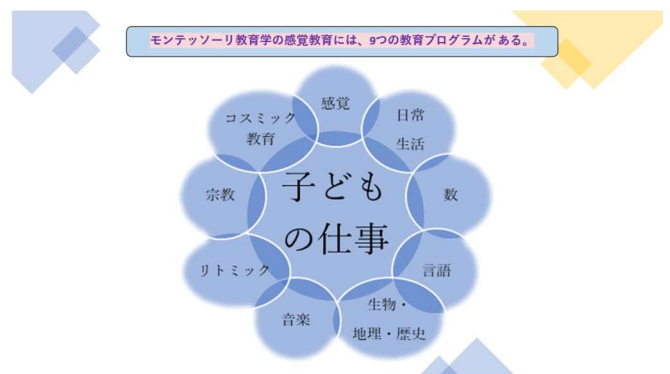


図 2: モンテッソーリ教育学における感覚教育
9つのプログラム

3-1 感覚教育「言葉と正常化」

正常化という概念は、こどもが周囲の物事に惑わされずに、自分の仕事に打ち込んでいる時の情緒の安定した秩序のある状態を示すものである。

モンテッソーリ教育学には、さまざまな感覚教具があるが、秩序のあるこどもの姿は、人の「言葉」によって培われる。

感覚を洗練させていくうちに、応答性を介し、こどもの知性が伸びていく。モンテッソーリ教育学では、こどもが逸脱から自分を取り戻した状態が正常であるとも言われている。具体的に述べると、こどもが、穏やかで、心の調和がとれている。落ち着いた秩序のある姿である。そして、自由と選択のある“快”の状態であることを示している。静かに見守り観察したとき、こどもの瞳は輝き、心は、喜びに満ちている。

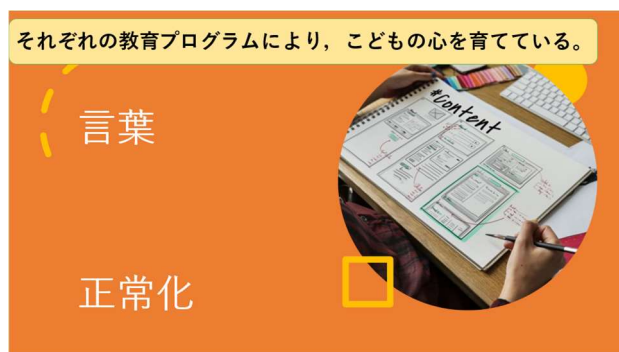


図 3: モンテッソーリ教育学における感覚教育 1

モンテッソーリ教育学は、日常生活の中に敏感期の要求に応じられる環境を整えていく。やがて、自ら発達を遂げる援助が、幼いこどもに大変重要である。

希望を得る言葉と出会うなかからこどもは豊かに育っていく。モンテッソーリ教育学には「文化」という領域があり、生物、地理、歴史も文化の分野に生きている。言葉の領域で培われてきたことは、こどもの想像力と共に知的好奇心として花開く分野なのである。世界地図、地球儀、世紀の時計数や言葉が集合し、こどもの興味が深まるものが感覚教育に結ばれる。

3-2 感覚教育「宗教とコスミック教育」

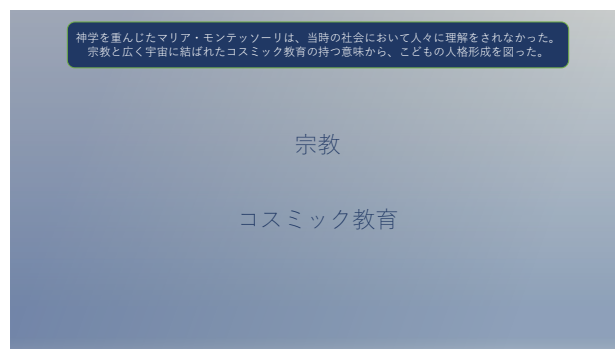


図 4: モンテッソーリ教育学における感覚教育 2

宗教について質問を受けたマリア・モンテッソーリは、「こどもは小さくても神様を理解します」と、答えた。こどもの生活は死と無関係ではない。また、感覚教育は、こどもが多くのものであるようにする窓でもある。

宇宙のすべての秩序を考察するなかから、新しく人格形成をしていくこどもの世代は宇宙の秩序と調和という統一的な考えのなかで自己教育を進めていって欲しいというマリア・モンテッソーリの願いが存在している。就学前になると、こどもはもっといろいろなことを取りたいという世界に目が開いていく。始めは自分の体や感覚を使うだけで精一杯だが、周囲からどういう能力を使えば良いかわかるようになると、こどもは自分を取り巻く世界がどのようにできているか、より大きな世界を探検したいと思うようになる。

モンテッソーリ教育学は、この時期のこどもの潜在能力を活性化し、引き出すような教育的援助を提供する教育なので

ある。「これは何だろう？ どうして？」と、不思議に思い、知見を得たいこどもに種を蒔くだけでなく、「地球全体の全てのは繋がっていて、あらゆる生物は互いに関連を持ちながら、様々な秩序のなかから互いに成長し合っている」と教えることが宇宙への興味や創造に結ばれていく。

このように、感覚教育を知性の形成と結び付けた位置づけからモンテッソーリ教育学のもう一つの特徴として感覚教育を自己形成と関連付けていたことが挙げられる。「共生と模倣」、つまり、人間は共に生きること、大人はこどもにモデルを示し、必要なときだけ手助けをすることが人間を育てる上で大切なことであり、生涯にわたるこどもの人格が0歳から築かれていると言っても過言ではない。

マリア・モンテッソーリは物理的環境の美しさや魅力、本物であることはこどもの活動の動機づけになることを伝授した。美的に魅力的なものは人間のポジティブな情動を生み、学習や好奇心、創造的な思考を醸成すると指摘した。また、モンテッソーリは、こどもを尊重する物理的環境とは、機能的に優れているだけではなく、大人が生活する環境と同様に魅力的で豊かな環境であることが必要であると述べ、感覚教育が真に生かされるために、大人はこどもに必要な援助を行うことが重要と考えたのである。

4. Art 活動支援

支援連携施設：やまびこ園・教室

こどもの発達を支援し、自分らしさを発揮できる基礎を養うために、遊びと生活を基本に療育する施設である。友だちの姿がみえやすいように、また、保護者が一人ひとりの思いを受けとめ、ありのままのこどもの姿に寄り添えるように、小集団で過ごされている。そして、保護者の方々と子育てやこどもの育ちについて一緒に考えたり、保護者活動を通して仲間を作ったりすることを援助されている。

4-1 やまびこ園・教室の物理的環境

こどもを尊重する支援児のための教育施設は、教育の理念を実現するためにだけ設定するのではなく、活動の主体であり、施設の主役であるこどもを尊重するためにも考慮され、設定されなければならない。こどもサイズを提案したマリア・モンテッソーリは単にこどもの体格に合った寸法にするだけでなく、こどもの体力、理解力をも考慮する必要があると述べている。

やまびこ園・教室でも、こどもが発達の法則・計画に従って発達するとはどういうことか、発達の各段階で何を必要とするのか、などを考慮しながら、こどもが発達するためには集中して活動することが必要であるなど、こどもの精神的発達の特徴を考え、こどもに適切な物理的環境の性質を工夫している。

図 5～図 7 にやまびこ園・教室の環境を提示する。



図 5: 広い廊下と心地よい空間

遠くまで見渡せる環境がこどもに自由を楽しむ感覚を与えている。ぶら下がりの玩具は、触って遊べるものである。



図 6: 動く玩具「好きなときに乗って遊べる」

やまびこ園・教室の支援員が、支援児を乗せて廊下を歩くことから、「乗せて」、「いいよ」など、会話が自然に生まれている。



図 7: タフロープのカーテン「かくれんぼして遊ぼう」

中に入ると透明感が感じられ、不思議な美しい世界が広がっていく。支援児のお気に入りの居心地の良い居場所である。

4-2 やまびこ園・教室の人的環境



図 8: 研修会の様子「施設・支援について勉強」

施設長の小川ことゑ先生からこどもの発達について話をお聞きした。講和では、生命と死についても教えがあり、保育の喜びだけでなく、悲しみや困難について

も共感的体験のできた研修会の機会が得られた。こどもだけでなく、保護者の方の気持ちを考えること、社会の中でのやまびこ園・教室の担う役割についても気付くことができたことに感謝する。

モンテッソーリ教育学の考えとやまびこ園・教室の施設長の考えの共通項を発見すると、乳児から幼児に成長していく過程には障害を抱えるか否かの違いを超えて、迎える時間の差はありながらも、こどもは「たくさんの不思議を知りたい」という文化の世界に瞳が輝く敏感期を経験することがわかる。始めは、自分の体や感覚を使い仕事をすることで精一杯のこどもも、やがて自分なりに自立しようとし、自分自身の人格を創り上げようとする。こどもは個人差を抱えながらも、成長と共に周囲を見渡し、どのような力を使えば目的が達成できるようになるのかがわかるようになる。そして、広い世界を旅するようになる。

5. モンテッソーリ園の教え

モンテッソーリ園の中でも、京都市に位置する「深草こどもの家」は、人格形成の樹立に「人に迷惑をかけないこと」を挙げている。21世紀を迎え、情報化がさらに進み、世界では今、こどもに大切にしていることは、人に流されないこと、自分の頭で考えることの二つのことであると考え。社会のなかで自分という人間の核を創り、核を強く、太くしていくこと。また、教師は、こどもの心の周辺に気配りをし、こどもが自己の心の中心部

で決断し、自己教育を行う場面では、敬意を持ち、こどもを認め、静かにその場から離れることである。

人格形成ということの営みについて、マリア・モンテッソーリは次のように語っている。

『それは、美しい花たちと小さな虫の愛の物語、また、風に乗って遠くへ旅をする一粒の種の語り。そして、秋から冬に移り変わりやがては土に帰る枯葉が新しい生命に変化していく話など、宇宙に生きるものが、無意識のうちに助け合う関係にあることを教えている。人間も与えられた知性と想像力を使い、物事を探求し、環境を変える仕事を続けている。過去から現在、そして未来へと、人は神から与えられた創造の仕事を継続し、成し遂げようとしている。人間に生まれて人間であることを誇りに思いながら、人間らしいところを未来へと成し遂げようとする。そのころそのものがこどもの人格に繋がっている⁶⁾』

モンテッソーリ教育学と出会い、半世紀の間、園長の赤羽恵子氏はより多くの日本人にモンテッソーリ教育学を知ってもらいたいと、著書に書き綴った。赤羽恵子著(2013)『自分で考え、自分を育てるモンテッソーリ教育』の終わりの言葉には人間の苦難となる戦争が二度と起こらないように、日本の教育を整え、真に自立した人間づくりをしたいという願いを持ち続けていることが語られていた。日本に生きるこども達が、自分から真心

ある行動が取れるよう、生きる希望を育んでほしいと願うのである。

図9～図12に、制作したモンテッソーリ玩具を提示する。



図9： メリークリスマス「光る玩具」

クリスマスツリーを表した気品ある飾りである。手にとって光を楽しむことができる。教室を暗くして、この玩具を点灯すると、光の粒が舞い、こどもの瞳が輝く。じっと見つめていると、幸せな思いが溢れてくる。親と子で一緒に鑑賞できることも喜びの一つである。



図10： 木の玩具「魚釣りの魚」

厚めの木の扱いが手にとった時、安定感

があり、魚釣りを体験する際に手作り感のある魚を感覚的に「可愛い」と、感じ取ることができる。油性ペンで魚の模様を描くことが出来る。一つの魚が仕上がるまでに時間を要するが、制作して遊ぶまでの道筋も制作の遣り甲斐がある。



図11： お散歩イヌ

木製のお散歩イヌは、こどもが楽しめる玩具である。工程が難しいが、木の温もりがある魅力ある玩具の一つである。こどもは、名前をつけ、話し掛けながら、お散歩イヌと「散歩」という活動を通して親密な友達になれるだろう。

6. 考察とまとめ

モンテッソーリの語りからは、人間にとって愛は、普遍的な精神力であり、愛と気高い感情の源である。愛が育まれる教育は、世界において、人類の間の統一に到達するための確実な道であることが理解できる。こどもサイズである魅力的なモンテッソーリ教具の生活道具や教材を使って豊かな自然の中で遊んでいる姿を

観察する時間が十分に保たれる。自分のやってみたい仕事(遊び)を自ら選び、生活の組み立てを教師と共にできるという体験は、こどもの意欲と感覚を活性化する。自分で選んだ仕事に集中し、やり遂げることにより、こどもは中心的課題となる人格形成を構築でき、人間としての喜びと満足感を得られるのではないのだろうか。

7. おわりに

最近、筆者は、視力低下から眼の手術を受け、退院し職場復帰した。学生たちが様々な形で見舞ってくれたが、その時々言葉に「その学生らしさ」が込められており、改めて人の個性や育ちの違いを一人ひとりに感じた。学生の背景に家庭や育った環境があり、感覚教育と環境は繋がりが深く、どのような人間が形成されているのか、他者に伝わるものであることを実感した。

ある学生は、「先生、僕のこれ見えますか?」と、2本の指を示し「はい、こう

ね」と、指で同じように表すと、「良かった!」と笑顔になった。ある学生は、「私の髪型が変わったのがわかりますか?」と、問いかけ、筆者が「わからない…」と答えると、「先生、見えていないよ」と、笑った。

ある学生は、研究室を訪れ、「先生、お大事になさってください」と、丁寧な言葉掛けをしてくれた。よくよく聞けば、家庭で教えていただき、教えの通り見舞いの言葉を掛けてくれたらしい。

このように、人間が人間として生きる上で非常に大切である「思いやりの心」は、マリア・モンテッソーリが述べる共生と模倣から創られていくことをささやかな日常からも感じることができる。

今回の研究で社会における支援の活動に取り組んだ体験は、自ら動こうとする自主的自発的な学生が生まれたと感じている。

引用文献

- 1) Maria Montessori, *Il segreto dell'infanzia*, Garzanti, 1975, pp. 36-37
- 2) K. ルーメル(1976)『モンテッソーリ教育』, Der Strat um Montessori 2, pp. 12-13
- 3) 前掲書 1), P. 102
- 4) クラウス・ルーメル著(2004)『モンテッソーリ教育の精神』学苑社, pp. 242-244
- 5) Montessori, *The Absorbent Mind*, The Theosophical Society, 1964, P. 84
- 6) Maria Montessori, “Formazione dell'uomo” IX edizione『1972』Garzanti, 坂本堯訳『人間の形成について』エンデルレ書店, pp. 122-126.

参考文献

- ・ 赤羽恵子著(2013)『自分で考え、自分を育てるモンテッソーリ教育』友好学園「深草こどもの家」後援会編
- ・ 赤羽孝久編(2004)『ルーマル神父 来日68年の回想』学苑社
- ・ 日本保育学会(2022)『自主シンポジウム発表要旨』
- ・ 前之園幸一郎(2014)『モンテッソーリ教育における宗教とこども』日本モンテッソーリ協会学会誌第47号
- ・ The School and Society and the Child and the Curriculum. Chicago: The University of Chicago Press. (デューイ, J., 宮原誠一(訳)(1957) 学校と社会, 岩波書店)
- ・ 早田由美子(2003). モンテッソーリ教育思想の形成過程 —「知的生命」の援助をめぐって—. 勁草書房
- ・ モンテッソーリ教育環境—社会的変容 と再考—. モンテッソーリ教育, 30, 80-89. 厚生労働省(編)(2008) 保育所保育指針解説書. フレーベル館
- ・ 三谷嘉明・佐藤敬子・村瀬亜理(訳)(1981) マリア・モンテッソーリ 子どもへの愛と生涯, 新曜社

要旨：感覚器官は乳幼児期に最も発達する。この時期に感覚を敏感にし、自分を取り巻く環境を正確に知ることが良い。こどもは環境に適応した行動ができるようになる。モンテッソーリ感覚教具は、こどもの心を磨く。さらに、感じ取る力を育てるために、分野ごとの仕事を用意されている。支援を求めるこどもには、心に響く場所と共感する人が必要である。本稿では、地域支援施設との連携からも人間形成について述べている。聖書は、人間が精霊により人となることを示した。豊かな感覚体験は、観察力や識別力を養い、乳幼児期における知的活動の土台を築いていく。